

# 高度な中国語修得者育成のため自作教材を作成



コミュニケーション学部  
言語コミュニケーション学科教授  
馮富榮(フォン・フーロン)

【学歴】  
1991年3月 名古屋大学大学院教育学研究科  
教育心理学専攻修士課程修了  
1994年3月 名古屋大学大学院教育学研究科  
教育心理学専攻博士課程満期退学  
1995年9月 博士(教育心理学)(名古屋大学第3号)  
【職歴】  
1996年4月 愛知文教女子短期大学幼児教育学科講師  
1997年4月 愛知淑徳大学文学部講師  
1998年4月 愛知淑徳大学文学部助教授  
2000年4月 愛知淑徳大学コミュニケーション学部助教授  
2003年4月 愛知淑徳大学コミュニケーション学部教授

馮教授は中国の大学で日本語を専攻し、日本語教師を経たのち、1986年に来日。97年から愛知淑徳大学で中国語を教えています。市販の教材は内容が学生の生活環境に身近でない、文法中心で実践的でないなど問題点が多く、コミュニケーション学部創設の4年前から自作教材を作成。1年で中国語検定3級に合格した学生もあり、成果を上げています。同時にテキストをホームページに載せ、学生が楽しみながら学べる中国語のメディア教材も開発。いわば愛知淑徳大学の学生のためのオーダーメイドの中国語テキストです。現在は1教科だけですが、来年度から受け持ちの7教科すべてをメディア教材とするため、休日返上で作成に取り組んでいるとのこと。



【最近3年間の著作リスト】  
「新・乳幼児発達心理学」(みらい)2000年(共著書)  
「新・教育心理学」(みらい)2000年(共著書)  
「学ぶ心理学・生かす心理学」(ナカニシヤ出版)2001年(共著書)  
「日本語教育のための心理学」(新曜社出版)2002年(共著書)

**名** 古屋大学大学院ではずっと日本語学習における母語中国語の影響という課題に取り組んでまいりました。その研究の結果を本にしたのが平成11年に風間書房から出版された、日本語学習における母語の影響」でした。修士課程でも博士課程でも、一貫してこの研究テーマに拘ってきたのは、中国で日本語の教師をしていたので、教育現場に何が役立つ研究ができればと思っただけです。

**愛** 知淑徳大学に来てから、中国語を教えるようになりました。特に3年前にコミュニケーション学部がスタートして以来、本格的に中国語を学習しようとする学生が増えてまいりました。そういう学生の要望にどう応えていけばよいか、愛知淑徳大学の中国語教育をどう特色づけたらよいかを考えるようになり、研究のテーマも中国人の日本語学習から日本人の中国語学習へと変わりました。

**具** 体的には、難易度のばらつきを適当に開き、学生の実力アップを図ること、習った内容を活用しやすいように、学生にとって興味のある話題を内容とすること、覚え易いように、同じ文型を同じ本文に繰り返し出現させること、日本語からの影響を配慮し、彼らに起こり得る問題について詳しく説明しておくこと、HSK試験の主題方式

ました。現在、主として教育方法及び教育の内容、教材の作成を検討しております。

**教** 育の方法を、メディアによる最新の中国語教育を実施することに、教育の内容を自作教材にしました。いわば、メディアによる中国語教育を愛知淑徳大学の特色として位置づけました。その理由は、コミュニケーションにおける有力な道具としてメディアがますます利用されるようになり、言語はまさにコミュニケーションに欠かせない道具なので、メディアなしでの言語教育が考えられない時代はまもなく到来すると予想されるからです。メディアによる中国語教育には多くの利点があり、まず愛知淑徳大学言語コミュニケーション学科のホームページを参照)がその作成、特にその基となる教科書の作成に苦労しました。とにかく興味を持ってもらえるように、そして実力が確実にアップするようにといろいろ

に做って練習問題を作り、HSK試験によく出題される表現をたくさん入れること、といった工夫がなされました。とにかく、愛知淑徳大学に来てよかったと思ってもらえるように中国語の教育をしていきたいと思えます。目標は社会に十分に通用できる中国語の能力を確実に養成することです。

Academic Library 著書紹介  
著者自らが近刊を紹介します。

「イノベーションの開発・普及過程 コミュニケーション科学による統合的解明」上巻  
文学部教授 宇野善康  
A5判/ +578ページ/晃文出版/10,000円/2003.2.20発行  
新しい知識情報や新製品、新行動様式などに具体化された革新的アイデアは、いかに開発され、普及したか。2000年間にわたって世界中に普及した万能解毒薬や日本で開発された水田除草剤などを実証的に研究した書。これらを統合的に解明したコミュニケーション科学に関する5つの論文を含む。

「北東アジア開発銀行(NEADB)の創設と日本の対外協力政策」  
コミュニケーション学部教授 真田幸光(共著)  
B5判/227ページ/東京財団モノグラフ・シリーズ/購入方法は東京財団にお問い合わせください。/2003.2発行  
本書は変動する北東アジア情勢、朝鮮半島情勢を睨み、北東アジア開発銀行という国際金融機関を創設した上で、地域の共存共栄の成長を目的とした経済協力政策を日本として如何に構築していくかを提案した書物である。尚、本書の概要は去る2002年7月末に小泉首相にも報告がなされている。

## ありがとう



愛知淑徳中学校英語科教諭  
大西由紀子

淑徳での余命も残りわずか。この8年、この学園でたくさんのご縁を学ばせていただいた。感謝の気持ちをここに遺したい。

大学を卒業し淑徳に入社した。交換留学から帰ってまもなく頃で、希望に落ちあふれたのスタートだった。文武両道の校風と友人の卒業生が母校を大切にしていた点に惹かれて就職を希望したが、入ってみて実際に生徒がのびのびと活躍する場が多数ある学校をすぐ好きになった。

最初はハントワリング部の顧問になり、全く専門外で戸惑ったが、6年一貫で経験豊富な生徒や一生懸命クラブに取り組み、楽しくて仕方がない生徒の姿に支えられ、共に励み成長した。

2年目からは国際交流の仕事にも関わることができるようになった。姉妹校のセントキヤサリンズと交流する中でまた各国からの留学生のお世話をすることで異文化に触れたことはいままでもないが、日本文化や日本人である自分への理解が深まったこと、文化を超えた普遍的なものが存在することを肌

で感じる事ができたのは自分にとり大きな財産になった。

そして何よりも多くのことを教えてくれたのは生徒たち。クラス担任、クラブ、夏山・スキー、学校などを通して、さまざまな生徒と出会い、その成長を見た。今となると楽しく美しい思い出ばかりが脳裏をよぎるが、つましいこと、ぶつかったことが、自分を成長させてくれたのだという点にも気づく。特に自分と異なる生徒と出会った、狭い人生経験から出来上がった自分の価値観が試され、苦しみを感ずること、またたびあった。そんな時は信念は曲げず、でも相手のこともわかろうと、できるだけ努力してきたつもりだ。私を大変困らせてくれた卒業生から最近、以下のような手紙を貰った。「私に代わって先生は番印象深い先生なんです。すくすく迷惑をかけたし、すくすく心配してくれました。感謝しきれない程です。先生の

何事も100%の気持ちでぶつかっていくところがすくすく好きです。...」時間はかかっても気持ちは伝わるんだとわかり、非常に嬉しかった。

こつて力不足の私が楽しく毎日を通し、苦しい時も乗り越えられたのは、周囲の教職員の方々のお陰である。その温かさがあらわれている副校長先生の言葉をここに書き留めておきたい。(今まで淑徳で育てていただき、やりこれから少しはお役に立てるかという時に、退職するまで申し訳ない私が申し上げると、淑徳で学んだことを社会のどこかで役立ててくれれば、それでいいんです。)

教員になつた頃、言葉で語らなくても生きまで生徒に何かを伝えられる人になりたいと思っていた。関西に移っても教職に携わるので、初志貫徹できるように誇りをもて生きてゆきたい。今まで本当にありがとうと書いてきました。

## 随想

1995年、学園90周年記念の年に